

2019（平成 31）年 2 月 23 日

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：現代中国における「八〇後」文学
学位申請者：王宇南氏（WANG Yunan）
指導教授：新谷秀明教授

1. 審査の経緯

2018年10月15日、王宇南氏より博士学位申請論文（事前審査用）が提出されたことを受け、西村将洋（主査）、新谷秀明教授（副査）の2名による事前審査委員会が組織された。事前審査委員は、王宇南氏が提出した事前審査用の論文について加筆・修正を加えるよう指示し、その結果、2018年12月10日、王宇南氏から加筆・修正された本審査用の博士学位申請論文が提出された。K. J. シャフナー学長から国際文化研究科に審査の付託が行われ、それを受け、12月19日の国際文化研究科委員会において、西村将洋（主査）、新谷秀明教授（副査）に加え、学外審査員（副査）として与小田隆一久留米大学教授を加えた3名による本審査委員会を立ち上げた。本審査委員会においては、まず各委員による個別の査読を行った上で、2019年2月4日に審査委員会を開催した。その結果、王宇南氏による博士学位申請論文（課程博士）の最終公開審査会を行うことが、委員3名の承認を以て最終決定された。同年2月15日、本審査委員3名ほか立ち会いのもと、王宇南氏博士学位申請論文の公開審査を行い、本審査委員会は王宇南氏の博士学位申請論文が十分に評価に値するものであるという結論に達した。以上の過程を経て、本審査委員会は王宇南氏の博士学位授与について、本日（2019年2月23日）の国際文化研究科委員会に諮ることを決定した。

2. 論文の内容

王宇南氏の博士学位申請論文は、中国で1980年代に生まれた「八〇後」（バーリンハウ）と呼ばれる世代の作家と作品を対象としており、序論、第一部の全四章と第二部の全三章からなる本論、そして終章にあたる「おわりに」で構成されている。

序論では、「八〇後」文学が社会的に大きな注目を集めているにもかかわらず、共産党の方針を反映した主流文学からは正当に評価されていない現状が述べられるとともに、現代中国を理解し、社会問題の改善を促すためにも、今後は「八〇後」文学に関する偏見を取り除き、より客観的に研究していく必要があると主張されている。

第一部では「「八〇後」文学の誕生と発展」と題して、「八〇後」文学に関する社会的な背景が考察されている。第一章では、計画出産政策（一人っ子政策）や改革開放政策に伴う市場経済の影響を受けた「八〇後」世代が、利己的、頑固、脆弱などと、否定的にラベリング

されている状況が紹介されるとともに、都市部と農村部の差異に注目しながら、「八〇後」文学における都市文学としての特徴が考察されている。

続く第二章では、「八〇後」文学が誕生する契機になった「新概念作文コンクール」の考察が行われる。1999年から始まったこのイベントは、業績不振に陥った文学雑誌社が、有力大学と連携して学生の作文を募集したもので、優秀者には大学入学資格も与えられたことから、大きな社会現象になり、このコンクールから「八〇後」文学の主要作家も多数輩出されることになった。

第三章は、「八〇後」の作家たちが刊行した文芸誌に関する考察である。代表的な雑誌に関する分析が行われるとともに、特に「ムック」(magazineのm-とbookの-ookの複合語)という出版形態が注目されている。近年の中国では定期刊行物の管理が強化され、新規の雑誌刊行は難しい状況にあった。だが、ムックはISSN(雑誌コード)ではなく、ISBN(書籍コード)で出版できたことから、複数の「八〇後」文芸誌の誕生が可能になったのである。

この雑誌に関する議論を引き継ぐかたちで、第四章からは、2010年代に新たな発表媒体として登場したスマートフォン雑誌アプリケーションが分析されており、インターネット上に掲載された作品の閲覧回数を基にした書籍販売についても考察が加えられている。

続いて第二部からは「作品から見た「八〇後」文学」と題して、実際の文学テキストに関する考察が行われる。第五章では、「八〇後」文学が生まれる際に影響を受けた思想や文化、文学作品が分析されており、欧米の哲学思想、台湾及び日本のポップカルチャー、さらには村上春樹の影響を受けた「七〇後」(チーリンホウ)世代の作家慶山の重要性が論じられるとともに、現代中国における「プチブル」概念の変化についても考察が及んでいる。

第六章は、「八〇後」文学に共通する感傷主義(センチメンタリズム)の分析であり、個々の作家の感傷性が検証されるとともに、「八〇後」文学の感傷性には、本来の孤独や憂いという意味内容だけでなく、多数の読者の共感を獲得するための手段としての側面が存在することが指摘されている。

こうした内容面の検討に続いて、第七章では、書式や文章記号などの形式面の考察が展開される。中国出版業界における書式の規則から逸脱するかたちで、「八〇後」文学においては、不規則な空白行の挿入や、段落冒頭の左詰め、極端に短い文章の連続や、意図的に長い分節の使用、あるいは無標点文字(文章記号なしの文章)など、特異な書記法が多用されており、これらの表現とインターネット上の書記法との関連性が考察されていく。

以上の議論を踏まえて、「おわりに」では、1950年代にアメリカで流行した「ビート・ジェネレーション」を取り上げ、「ビート・ジェネレーション」がポスト・モダン文学の重要な源流となったように、「八〇後」文学もまた今後の中国における新たな文学活動の源流になるはずだ、と位置づけられることになる。

3. 論文の評価と課題

王宇南氏の博士学位申請論文は、第一部では統計データなどを用いた社会学的な方法が、第二部では文献学的かつ実証的な文学研究の手法が用いられているが、特に注目に値するのはメディア研究としての側面である。

第一部第二章で論じられた新概念作文コンクールは、中国における文学雑誌や作文教育の不振を打開するためのメディア・イベントという側面を有しており、市場経済とイベントを支援した高等教育機関（大学）との関連性や、硬直化した受験制度と教育の問題、インターネット上でアイドルとなり商品化されていく文学者イメージの問題など、メディア研究的な視野のもとで、文学活動、消費社会、アカデミズムからなる複雑な問題領域が、丁寧に論じられている。こうしたメディア研究という特徴は、第一部第三章で「ムック」というメディア形態に注目して、「八〇後」文学における雑誌ブームの舞台裏を跡づけた部分、さらには第一部第四章および第二部第七章で、「八〇後」文学とインターネットとの関連性を考察した部分にも貫かれており、貴重な研究成果として評価することができる。

だが他方で、第二部で考察された「八〇後」文学の特徴、たとえば第五章のアルファベットによる外国語の横文字表記や、第七章の無標点文字などは、すでに1930年代のモダニズム文学にも実例が見られる表現であり、そうした中国近代文学における表現の歴史を踏まえた上で、より総合的で慎重な分析を行う必要があると考えられる。

こうした発展的な課題が残されているものの、上記のように王宇南氏は「八〇後」文学を、出版メディア、市場経済、教育機関、インターネットといった複合的な視野のもとでの確に論じており、本論文は今後「八〇後」文学を研究する際の必読文献になると考えられる。

以上のことから、王宇南氏より提出された博士学位申請論文は、十分に博士の学位を授与するに値するものとして、大学院国際文化研究科委員会に諮るものである。

王宇南氏博士学位申請論文審査委員会

主 査： 西村 将洋

副 査： 新谷 秀明（指導教授）

副 査： 与小田 隆一